

平成26年度 学校課題研修について

1 研究主題

『人とのかかわりを大切にし、共によりよく生きようとする児童の育成』

～国語を適切に表現し正確に理解する力を育成し、伝え合う力を高める指導法の工夫～

2 主題設定の理由

本校は、平成20年度に文部科学省指定道徳実践研究校、さらに吉川市教育委員会より「学習指導法の改善」の委嘱も受けたことを契機に、道徳の授業改善を中心に道徳教育の研究を進めてきた。

平成24年度からは、道徳教育の研究に加え、吉川市教育委員会より体力向上推進校として2年間の委嘱を受け、体力向上の研究に取り組んだ。「運動量の確保」「意欲・技能の向上」「教え合い・学び合い」を研究の柱とし、学習規律の定着と学習過程の明確化を図ることを基盤に、体育授業改善の研究を進めてきた。運動への意欲をもたせるための教材・教具の作成、環境整備に取り組むとともに、体力づくりの生活化を図るため、養護教諭や栄養教諭との連携による食育や健康教育の研究にも取り組んできた。

道徳・体育の授業改善を柱として継続して進めてきた6年間の研究により、他人とともに協調し、他者を思いやる心や感動する心、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力及び健康の保持増進のための実践力を育成してきた。これは、まさに「生きる力」の「豊かな感性や人間性」「たくましく生きるための健康や体力」に通じるものである。

本校の児童の多くは、面倒見がよく、友達に対して思いやりの心を持って接することができる。全国学力・学習状況調査においても、「学校のきまり、友達との約束を守っているか」「人の気持ちがわかる人間になりたいか」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思うか」「自分の考えや気持ちを理解してくれる友達がいるか」等の質問事項に対して、当てはまる（どちらかといえば当てはまるも含む）と約97%の児童が回答しており、友達のよさを発見する目や人とのかかわりを大切にしようとする心も育ってきていると分析できる。

しかし、言葉が足りず友達とトラブルになったり、授業の発表では、自分の考えをはっきりと発表したり説明したりすることができない児童も多い。このことは、全国学力・学習状況調査における「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くができていないか」等の質問には、約90%の児童が当てはまると回答していることに対し、「友達の前で自分の考えや意見を発表することが得意か」の質問には、当てはまるという回答が半数以下となっていることと関係がある。すなわち、自分の考えを言葉にし、適切に表現する力に課題があると考えられる。

また、国語科における諸調査の結果では「目的に応じ読んだ資料の特徴や意図を捉えること」「目的や場面に応じて必要な事柄を整理して簡潔に書くこと」「目的や意図に応じ書く事柄を整理し、自分の考えをもつこと」等、思考力・判断力・表現力等にも課題があることが分かった。

そこで、今年度は、これまでの研究で培ってきた能力を生かしながら、国語科の授業改善をベースに、学校教育法に明示された「学力の三要素」すなわち、「基礎的・基本的な知識や技能」「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の育成に力を入れ、知・徳・体の調和のとれた「生きる力」をより一層を育み、すべての児童に自立して生きていくための基礎をしっかりと身につけさせていきたい。

特に学習指導要領実施の折り返し期を迎えたこの時期に今一度これまでの指導の在り方を見直すことが必要であると考え。生きる力を育む授業の創造を目指すためにも、

①知識及び技能を確実に習得させるとともに、これらの活用を図る学習活動や言語活動を充実させ、思考力、判断力、表現力等を育むこと。

②児童が学習の見通しを立てたり、学習を振り返ったりする活動や児童同士がお互いに学び合ったりする活動を取り入れる。さらに、日課表に位置付けている朝の基礎基本の時間における補充的な学習の充実を図ることなどを通して学習内容の確実な定着を図ること。

の2つを大きな柱として研究を進めていきたいと考える。

以上のことから、研究主題「人とのかかわりを大切にし、共によりよく生きようとする児童の育成」、副題を国語科の目標に則り、「国語を適切に表現し正確に理解する力を育成し、伝え合う力を高める指導法の工夫」と設定した。

3 研究の概要

(1) 目指す児童像と研究仮説

目指す児童像

基礎基本の知識や技能を活用して自分の考えを表現できる子

研究の仮説

国語科において、課題解決的な単元を貫く言語活動を設定し、学年の実態に応じて取り上げる言語活動を工夫した指導と評価をすることで、国語を適切に表現し正確に理解する力を育成し、伝え合う力を高めることができるであろう。

さらに、国語科で培った言語の力を児童に自覚させることで、他教科や日常生活でも活用できる力につなげることができるであろう。

(2) 今年度の取組

- ① 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域において、学習指導要領に示された言語活動例を通して指導事項を身につけさせるという視点で単元を展開する。
 - ・「話すこと・聞くこと」の言語活動例
話すことと聞くことが一体化して考えられるように、説明や報告を発表したり、それらを聞いて感想や意見を述べたりすること、紹介や推薦をしたり、それらを聞いたりすることなど。
 - ・「書くこと」の言語活動例
詩や物語など創造的な内容について書くこと、説明や報告、紹介や手紙などの日常生活で活用されるものを書くこと、学級新聞などに表すことなど。
 - ・「読むこと」の言語活動例
物語や詩、伝記などの創作や、説明などの多様な本や文章を読んで感想を述べたり考えを表現したりすることなど。
- ② 国語科の学習内容についての見通しと振り返りを位置づけた授業を展開する。
 - ・特別支援学級、通常学級における特別な支援を要する児童への指導の視点に基づき、多くの児童に分かりやすい授業の進め方を基本に、個別のニーズに応じた配慮や支援を行う。
(授業のユニバーサルデザイン化の視点)
例 1つ1つの課題は、子どもの集中が続く時間を考える。
見る、聞く、話す、書く、操作するなど変化のある学習活動を取り入れる。
「ゆっくり」「短い言葉で」「具体的な」指示や発問等を意識する。など
 - ・言語について、どのような知識・技能を身につけさせ、どのような思考力等を育てるかを明確にして授業展開をする。(学習過程の明確化)
 - ・児童には教材の内容ではなく、国語科の学習内容(「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)についての見通しと振り返りをさせ、授業を通して身に付けた言語の能力・既習事項を自覚させ、その後の学習や日常生活等に活用してみようという意欲につなげる。
(考える過程が見えるノート指導や話し方(説明・発表)や話し合いの進め方の指導)
- ③ 2学年のまとまりで示されている3領域1事項の目標・内容について、各学年で指導する内容を具体化する。・6年間の学習の系統性を明らかにした指導計画の見直し・作成
- ④ 言語環境を豊かにする潤いのある校内掲示物や話し方(説明・発表)や話し合いの進め方等の教室掲示物等を作成する。
- ⑤ 読書活動を充実させる。
 - ・読み聞かせボランティアの効果的な活用
 - ・読書活動(朝読書・自由読書)の推進、図書館サポートティチャーとの連携・協力
「全校児童によるおすすめ本」の掲示、目標冊数を超えた児童の表彰、図書便りの発行
特設コーナーの設置(季節や行事にちなんだ本・教科書の関連本・「先生のおすすめ本」等)
- ⑥ 「基礎基本の時間」の年間計画作成・見直しを行う。

4 研究組織

